



映画『赤い闇』の恐怖、わが身に迫った

山口 カ三



実在した英国人記者ガレス・ジョーンズ（ジェームズ・ノートン）の物語。命がけてソ連の穀倉地帯ウクライナ取材に入るシーン。童謡か民謡か不穏な歌詞が流れる。「隣の母さんはとうとう頭がおかしくなってしまった」。そして道端に放置された遺体の映像に被って「とうとう子どもを食べてしまった…」。

描写はむしろ抑制的だったが、正視できなかつた。400～700万人もが飢餓などで死亡したと言われる「ホロドモール」(人工飢饉)だ。穀物の全量を家族分も残さず供出させ、抵抗すれば逮捕処刑という恐怖政治。ナチスのホロコースト、ポルポトによる虐殺、ルワンダの悲劇などと並んで近代最大のジェノサイドと言われる。

6月1日、エルプラザのビデオ鑑賞会『赤い闇～スターリンの冷たい大地で』に参加した。市内上映を見逃していた作品。札幌映画サークルの仲間である池田光良さんが解説されると知って申し込んだ。ロシアによるウクライナ侵攻(2022.2.24)の2年前にポーランド・イギリス・ウクライナが合作しヴェネチア映画祭にも出品された。今日の独裁者プーチンと90年前のスターリンが二重写しに見えると、話題になっていた。

まだ近くにある過去

私も2.24に仰天した一人だ。アパート、商業施設への容赦ない砲撃に『アルジェの戦い』(1966)を思い出していた。フランスが植民地の抵抗運動を軍事力で押し伏せた映画だった。親友にそう書いてハガキを送ったら「オレは子どもだったが太平洋戦争末期、ロシア兵に襲われて親・姉妹と命からがら引き揚げた記憶がよみがえった」と初めて知らされた。そうだ、満州も朝鮮半島も「北方領土」も、海峡をはさむ隣国であり、時間もまだ色濃くつながっているのだ。

監視される記者クラブ

『赤い闇』は1933年、私が生まれる6年前の事件だ。世界恐慌のさなか、一党独裁で政治経済を押し進めるソ連だけが豊かに繁栄しているのはなぜか？ 欧米メディアも新時代のユートピアとか伝えているが本当なのか？ 疑いを抱いたジョーンズがモスクワに入る。直前まで英首相の外交顧問で、ヒトラーにインタビューしたこともある彼は、スターリンにも会いたいと考えていた。

待っていたのは秘密警察や密告者に監視された外国人記者クラブの実態だ。壁に耳あり障子に

眼あり。報道官の意に添わぬ記事を書いて送れば要注意人物とされ、取材も自由行動もできず自国に帰る他ない。本社もそれは望まない。監視と良心の呵責に堪えかね酒やアヘンに溺れる記者もいた。ジョーンズは慎重に仲間との距離を測りながら、友人の英国人男性記者と米紙の女性記者に近づく。そして穀倉地帯のウクライナで、まさかの飢饉が起きているらしいと聞き込んだ。

そこからはサスペンス映画さながら。友人記者は連絡が取れなくなり、「強盗に襲われて死んだ」とクラブで伝えられた。後で女性記者は「実際は暗殺されたのよ」と耳打ちする。

外国人記者クラブのヌシはピューリッツァー賞を受けた大物米記者だ。誰かが問題ある記事を書けば締め付けが来る、と自主規制の網を張り自ら監視役を務めているようにも見える。

アメリカ映画では『市民ケーン』(1941)ははじめ新聞・テレビ・ラジオなどをテーマにしたメディアものが大きな存在感を持つ。ケーンのモデル、新聞王ハーストは毀誉褒貶のある大経営者だが『赤い闇』の終り近く、ジョーンズの報告を聞き米紙に掲載指示をする場面がある。もっと後になると『大統領の陰謀』(1976)『ペリカン文書』(1994)『ペンタゴン・ペーパーズ』(2017)など。多くは真実の報道と言論の自由を高らかに称揚する内容だ。ヨーロッパにもかなりありそうだがいま思い浮かばない。日本映画ではわりと少なく、近年の『新聞記者』(2019)と『はりぼて』(2020、ドキュメンタリー)、日本が舞台の米作品『MINAMATA』(2020)は記憶に新しい。安倍疑惑を模した『新聞記者』では、情報を漏らした正義漢の公務員が自殺する。遺族が文書改ざんを命じた上司の責任を問う裁判は現実社会で今も続いている。

地方記者にも他人事ならず

かくいう私も50年前は記者の端くれだった。ジャーナリストと名乗るのは面映ゆい地方記者。空知のまちで炭鉱事故にピリピリしていた。外国への特派経験はなくピューリッツァー賞など憧れさえも持たなかったが、為政者と記者の関係は大小の差はあれど基本的によく似ている。どんな田舎でも、書か

れたくない部分はある、できれば都合良い記事だけ流してもらいたいものなのだ。

私が退職した後に発覚した「道警裏金事件」。独自調査ですば抜いた道新はその後交通事故の取材にさえ意地悪されたそう。また別件で本社役員室に家宅捜索が入るとも聞いた。他社やテレビに大々的に報道させて道新はヤバイ会社だと信用失墜を狙ったのか。ソレツと他社が集まって派手なニュースになった記憶はないが。

対政治はもとより警察と報道のせめぎ合いはジャーナリズム史に数多い。小さな誘惑、重なれば泥沼のワナは日常的に警戒を怠れない。私の先生であり上司だった記者は一滴も飲めない人だったのに、飲み会に呼ばれたら断らず、ノシ紙に包んだ一升瓶を携えて行った。些細なことでも心理的に借りを作りたくないからだ、と言っていた。

エンドロールの衝撃

私は歴史が苦手だ。池田さん配布の中身濃い解説資料にあるドストエフスキーは1作も読んでないし科学史も初めて聞く話ばかりだった。この映画に登場するジョージ・オーウェルの『動物農場』の

雌鶏たちに関する部分は同事件をベースにしているそう。オーウェルがジョーンズに「真実を書け」と忠告するシーンは、池田さんによれば映画の創作らしいのだが。

知識乏しい私は、皇帝志向だの大ロシアだの、ナポレオンだナチスだと、多彩な解説・報道に戸惑うばかりだったが、あの地域の複雑な状況をおぼろげに理解し始めている。かつての軍国日本も引き合いに出される。返す言葉に窮するが、だからと言って「歴史の審判が下るまでは、どちらの味方もできない」と逃げていては、現代に身を置くものとして情けなさすぎる。殺戮を終わらせ、終末戦争は何としても避けなければならない、と考えるならジョーンズの勇気を見習わなければ…。彼と彼に続く真実の報道が無かったら、世界は長い間、赤い闇を遠くから透かし見るだけだったかもしれないのだ。

真のジャーナリズムが貫かれた、と感動した後で、胸に突き刺さったエンドロールについても書かねばなるまい。ソ連再入国を禁止されたジョーンズは、1935年8月12日、取材活動中を暴漢に襲われて死んだ。30歳の誕生日前日、日本統治下の満州であった。（やまぐち・りきぞう、元北海道新聞記者）



《第100回例会》ポーランド名画ビデオ鑑賞会を終えて

『赤い闇～スターリンの冷たい大地で』

札幌エルプラザ、2022年6月1日(水)【お話】池田光良(会員) =写真=



ロシアのウクライナ侵攻という衝撃的な事態を受けて、ウクライナとロシアの関係史をソ連時代に遡って考えてみたいというのが開催の動機でした。参加者は23名(うち会員12名)。

上映に先立って、映画歴66年で札幌映画サークルの会員でもある池田光良さんを講師に、作品の時代背景と近年のスターリンやウクライナをテーマにした映画について詳しく解説いただきました。30分という限られた時間でしたが、大変中身の濃いお話で、あらためてスターリン独裁政治の恐ろしさとウクライナが負った苦難の歴史について思いを巡らせるとともに、ウクライナ戦争の一日も早い停戦を願わざるをえませんでした。

参加者の感想

- ホロドモールについて知ることができたのでよかったです。この映画を見られてたいへんよかったです。
- ぜひ見たいと思っていましたが、想像以上！こんな凄い映画だったとは。ガレス・ジョーンズの名も知りませんでした。ジャーナリズムとは何か、深く考えさせられました。池田さんは知人で、博識は存じていましたが、広く資料にあたり検証される態度に感銘を受けました。オーウェルも読まなくちゃと思いました。

- 池田さんの資料がショックでもあり、また自分の不勉強さが身に染みました。ロシアは変わりませんね。戦争が一日も早く終わりますように。
- 映画は分かりやすく、よかった(暗くて重いけれど)。お話の資料は内容豊富で貴重。
- 見ごたえありました！不勉強な私にとって、ちょっと難しい内容でしたが、時代背景の資料は本当に助けになりました。感謝。もう一度みたい映画です。そして、今のウクライナの状況を改めて考えたい。
- ロシアの今の姿勢の底に流れる歴史、貧困、国民性などを感じ、ショックを受けました。今のウクライナに対するロシアの残酷さがここにつながるのか、とわかるような気がします。
- 池田さんのお話は、どこも参考になったが、特にルイセンコ学説についての説明が印象に残った。科学にイデオロギーをまとうせることの危険性、「科学的社会主義」なるものの虚偽！

(園部真幸、運営委員)